交通安全の価値（かち）を考える

小林 眞

愛知県春日井警察署長等を歴任し、平成28年より「AAKK」専務理事。
「安全運転を習慣とすること、そのための努力を惜しまないこと」を提案している。

第7回

子供は車内で事故にあう

お母さんたちに向けて「お子さんはどこで交通事故にあうのかご存じですか？」と問いかけると、怪訝そうな表情が浮かぶ。「交通事故にあう場所なんて、道路でしょう？違うの？」

平成30年中、交通事故でケガをした4歳以下の幼児は全国で6、240人である。そのうち、歩行中は847人、自転車乗車中が663人、最も多いのは自動車乗車中で4、705人である。つまり、交通事故でケガをするその75％は車の中である。

そして、この年代のお子さんは車を運転しない。つまり、お子さんが交通事故にあう場所とは、お母さんやお父さんが運転している車の中である、ということになります。

ぶつけるかぶつけられるかはともかくとして、これが現実であることを踏まえて問いかけます。「それでもチャイルドシートを着用させずにお子さんを乗せて運転しますか？」

その問いかけに対して答えはさまざまです。「チャイルドシートの費用がもったいない」「子供が泣いて運転に集中できない」「子供がいやがる」など、消極的な意見も聞こえてきます。

しかし、その結果として発生した惨劇は、消すことも忘れることもできません。命を失うことだけではなく、お子さんが顔面を複雑骨折したり、大きな後遺症が残ったりする、そんな例は決して少なくありません。

全国で、過去5年間（平成25年～29年）に自動車乗車中の交通事故で死亡した6歳未満の子供は56人であり、このうちチャイルドシートを着用していなかったのは38人、約68％にのぼる。また、チャイルドシートを着用しなかった場合の致死率は、着用した場合に比較して約16倍（平成29年中）とのことであるが、16倍だから着用するのではなく、それが2倍であっても着用する価値を認める必要があると考えています。

私たちは、記憶を消して生きていくことはできません。もちろん、人生は決して楽しいことばかりではなく、すべての人の人生には辛いことも悲しいこともあるはずです。それでも私たちは、取り返しのつかないことや思い出しては後悔することを避けようとしています。それを知恵というのではなかったでしょうか。

私たちの社会の子供たちが、私たち以上に自由で充実した人生を送ることができるように、私たちはできることを重ね、その後を子供たちに委ねること、それこそが私たちの果たすべき役割ではないでしょうか。

交通事故を予想し、思い描き、その結果を避けるために必要な行動をとること。チャイルドシートを購入し、正しく設置する手間を惜しまず、子供が泣いてもなだめて座らせる面倒を厭わないことです。そうした知恵を失わず、手間を惜しまないことが、大切な子供たちとその将来を守っていくのだと考えています。

「多分大丈夫、きっと大丈夫、私は大丈夫……」そんな根拠のない言い訳にすがっても、ひとたび事故が発生してしまえばその惨劇を消すことはできません。何度後悔しても現実は変わらず、忘れることもできません。

もう一度問いかけます。「それでもチャイルドシートを着用させずにお子さんを乗せて運転しますか？」